

●第26回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム

(2020年2月28日-3月1日、ドイツ：レーゲンスブルク)

報告者：濱田 朱美 (チュービンゲン大学、主催者)

2020年2月28日から3月1日の3日間、第26回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウムがドイツのレーゲンスブルク大学で開催された。このシンポジウムは、レーゲンスブルク大学とその言語コミュニケーションセンターの全面的な協力と国際交流基金の助成を受け、高邑ツォルネック真弓シンポジウム実行委員長 (レーゲンスブルク大学) の尽力により実施が実現した。

本研究会 (正式名称は *Japanisch an Hochschulen e.V.*、略称 *JaH*) は、ドイツで1994年から活動している公益法人で、毎年1回会員の所属する機関を会場としてシンポジウムを開催している。*JaH* の会員数は70名 (2020年1月1日現在) で、今回のシンポジウムには会員33名、非会員13名、計46名の参加者がドイツ、日本、スイスから参加した。本研究会の会員は、会の定款により、ドイツ語圏の高等教育機関で日本語教育に携わっている者がほとんどとなっている。

毎回シンポジウムにはテーマがあり、今回のテーマは「会話力を育む - インターアクション能力育成のための会話教育」で、講師に東京外国語大学の中井陽子先生をお迎えした。これまでのシンポジウムで「会話教育」そのものをテーマにしたことがなかった一方、どの教育機関でも会話能力の養成を扱わない授業はないという状況から、ドイツ語圏の大学でどのような会話の授業が行われているのか、その実施状況を知りたいという会員の要望によりこのテーマが選ばれた。初日の開会式では開催地であるレーゲンスブルク大学学長の *Prof. Dr. Udo Hebel* 氏に続き、同大学言語コミュニケーションセンター所長の *Dr. Thomas Stahl* 氏から滞在先の京都より *Skype* を通して歓迎のお言葉とご挨拶があった。また在ミュンヘン日本国総領事館からお越しいただいた木村徹也総領事とケルン日本文化会館の相澤啓一館長からもドイツ語圏で日本語教育に携わる参加者に温かい激励のお言葉をいただいた。

開会式の後、まず中井先生より「インターアクション能力を育てる会話教育のための理論と分析」というタイトルの基調講演があった。ここでは会話の種類と機能について、またインターアクション能力とは何かなど、基本的なことを確認した上で、参加者が実際に会話のビデオ映像を見て、それを小グループでインターアクション分析した。このように一方的な講演ではなく、インタラクティブな参加型のセッションであったため、参加者全体がアクティブモードに入り、シンポジウムのいい流れができた。2日目は二本の会員発表の後、パネル発表形式で授業紹介が行われたのだが、それぞれの教育機関で実践している授業を紹介するだけでなく、うまくいっていない点や困っている点について他の参加者の意見や提案を直接聞くことができる良い機会となった。通常、教育機関に日本語教師が一人しかいないところも多く、孤軍奮闘している参加者にとっては特に貴重で実践に役立つアイデアがたくさん聞けたというポジティブな声が多く聞かれた。2日目の後半は、講演を踏まえて会話授業をチームでデザインする

ワークショップがあり、最終日の朝にその成果を発表し合った上で、中井先生からのフィードバックや参加者からの質問を受ける時間が取られた。このようにシンポジウム自体が盛り沢山の内容であったのだが、コーヒブレイクやレセプションでも和やかに情報交換が行われ、非常に充実した三日間となった。

JaH では 2009 年より隔年で紀要『Japanisch als Fremdsprache』を出版しており、今回のシンポジウムの基調講演、会員発表の他、ドイツ語圏大学の会話に関する日本語授業のアンケート結果をまとめたものを含め、第 7 号（2021 年出版予定）に掲載されることになっている。バックナンバーは JaH のホームページ上で公開されている。（<https://www.japanisch-an-hochschulen.de>）